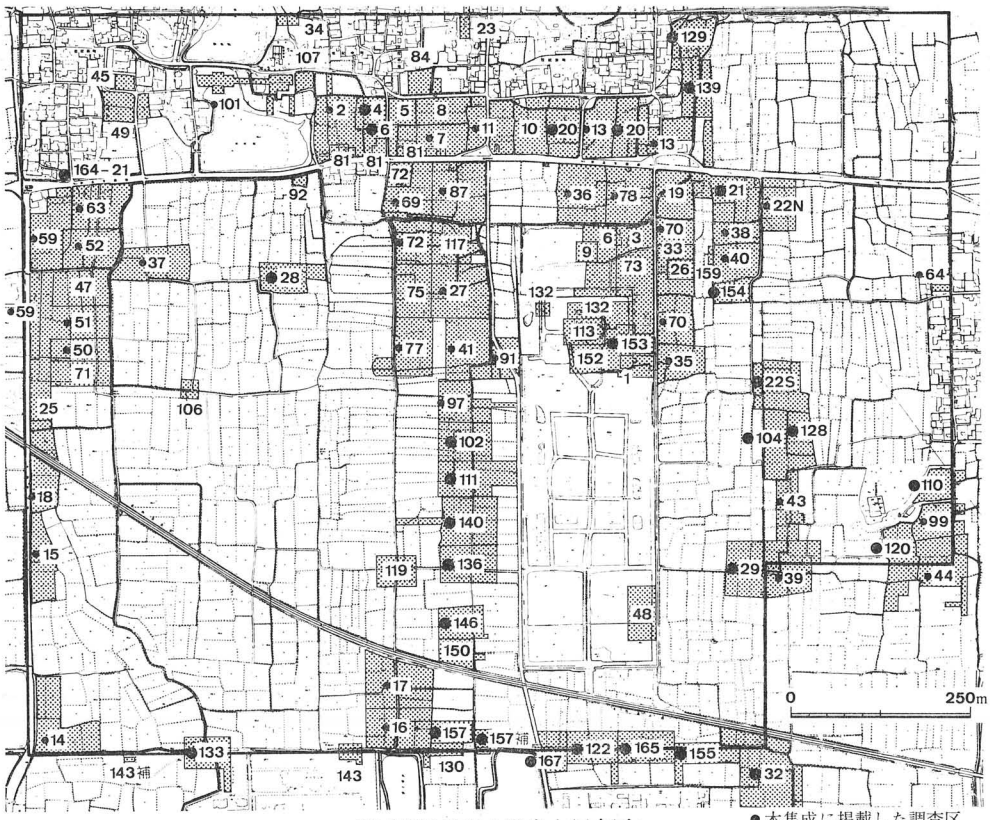
# 第2章　墨書土器を出土した主な遺構

墨書土器は，ほぼ平城宮の全域から出土するが，その大半は溝からである。ほかには土壙，井戸などからも出土し，包含層からの出土数も多い。ここでは，比較的まとまって墨書土器の出土した遺構を中心に概略を述べることとする。

**SD1250**　平城宮南面の外堀で，同時に二条大路北側溝をかねる。ほかの溝と合流するところでは極端に広く，また深くなっているが，それ以外のところでの平均的な大きさは，上端で幅3～4ｍ，深さ0.9～1.2ｍである。随所に杭とシガラミによる護岸が認められ，壬生門(南面東門）の前面では，石積による護岸がおこなわれていた。ここではまた，奈良時代後半に，溝の堆積土を除去することなく埋めたて，通路としていることもわかっている。若犬養門（南面西門）の前面では，橋脚を確認した。墨書土器は，第32次，第122次，第133次，第155次，第165次の各調査区で出土しているが，『集成Ⅰ』に報告した第32次調査(41点)と，本『集成Ⅱ』にかかげた第133次調査での若犬養門前面（51点）に出土量が集中し，「雅楽」のほか，「厨菜」など「厨」関係のものがまとまって出土している。

**SD2700**　内裏東外郭官衙と東方官衙群の間を南流する南北溝で，平城宮の幹線水路と考えるものである。昭和3(1928)年と同7(1932)年に奈良県技師岸熊吉氏によって確認され，平城




平城宮跡墨書土器出土調査区

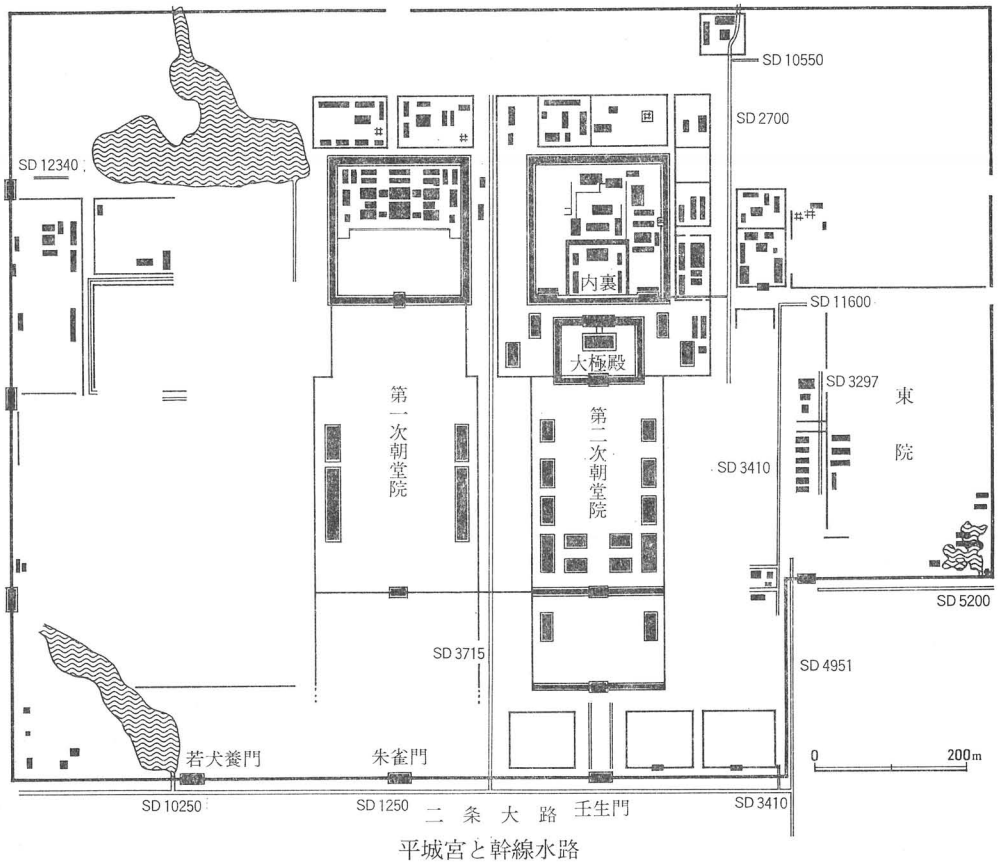
●本集成に掲載した調査区
•「集成Ⅰ」に掲載した調査区

宮跡発掘調査部でも第21次調査以来，第129次，第139次，第154次と数次にわたる調査を実施して，溝の規模と構造を明らかにしてきた。溝の大きさは，北の方の第129次と第133次調査区では，上端で幅約2m，下端で0.9m，深さ1.4mであるが，南の方の第154次調査区では，幅6m前後に広がり，深さも2.2mある。溝は，奈良時代当初はすべて素掘りと考えられるが，養老年間頃より一部に石積の護岸が施される。護岸の状況をみると，第129次調査区で確認した北端部はすべて素掘り，第139次調査区の途中から南は両岸とも約30cm大の河原石で護岸，第21次調査区の南端から第154次調査区にかけては東側だけ護岸，そして東の塼積官衙の終わるあたりで東岸の護岸もなくなる。このことから石積の護岸は，内裏の東側あたりに限られていたものと考えられ，西側の護岸については抜き取られた可能性もある。

第139次調査区では，溝の北端を確認している。ここでは奈良時代当初にはおそらく水上池から西南にかけて流れる細い斜溝にはじまり，南折して真直ぐに南へ流れていたが，天平年間に大幅に東につけかえている。溝の堆積土は，5～6層に分かれ，各層とも土器，瓦，木器，木簡，金属製品など多彩な遺物が大量に含まれていた。さながら平城宮における遺物の宝庫の観を呈している。墨書土器もすべての調査区で出土しており，今回報告するものだけでも，331点と最も多い。中に，「天平18(746)年11月20日」の年紀の入ったもの（522）もある。

本集成には，『集成Ⅰ』で報告済みの第21次調査の補遺も加えた。なお，岸熊吉氏が調査したときに出土した遺物の一部は，溝辺文一氏が保管しているが，これについても，氏のご好意によりあわせて再掲載させていただいた。

**SD3109**　東院の西を限る南北築地塀の東雨落溝である。第128次調査で検出した。溝幅は約10.7mで，西岸は径13.0cmの丸太を半裁した杭を打ち，この外側に側板を落としこんで護



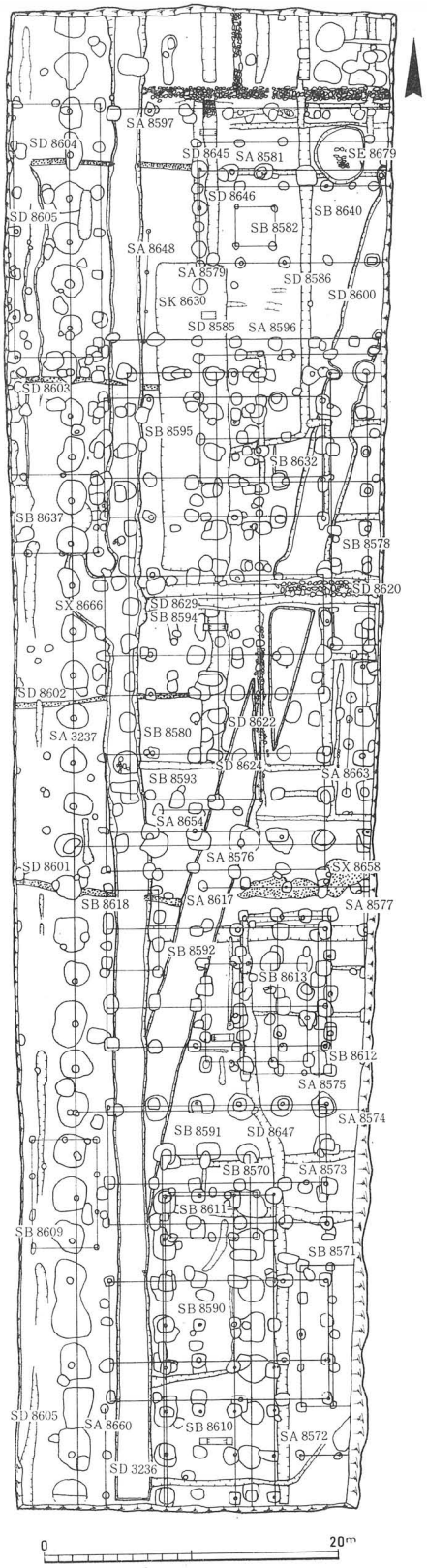

平城宮と幹線水路

岸としている。底には全面に玉石を敷く。木簡をはじめ，大量の土器が出土しているが，食器類の多いのが目立つ。年代的には奈良時代後半のものである。墨書土器は，「造宮」，「供養」，「菓子」など87点が出土した。

**SD3113**　東院地区西方の南北溝で，一部斜行する。第22次南調査区でも確認しているが，今回報告するのは第128次調査で検出したものである。溝幅 2.0ｍ，深さ 0.8ｍ で，上下２層に分かれる。東側をほぼ平行して流れるＳＤ9620（後述）を西へつけかえたもの。溝中より，「天平勝宝」の木簡が出土しているので，この時期まで存続していたものと思われる。墨書土器は，25点。

**SD3236**　東院地区の西端を流れる，素掘りの南北溝である。第22次南調査区（『集成Ｉ』で報告済み）と第104次調査区で確認した。溝は３時期に分かれ，下層と中層は溝幅約２ｍ，深さ 0.6 ｍ，上層はやや小さく，溝幅 0.9 ｍ，深さ 0.15 ｍ である。下層溝の西岸には，一部木杭による護岸がある。各層とも実年代には大きなへだたりはなく，奈良時代後期の溝である。下層，中層の溝中からは，「天平勝宝」から「宝亀６年」までの紀年木簡８点をはじめ，多量の木簡，土器，瓦が出土した。土器は，大部分が平城宮土器編年のＶ，軒瓦は，平城宮瓦編年Ⅲ期に属する。墨書土器は，129 点と多いが，大半が中層の出土である。

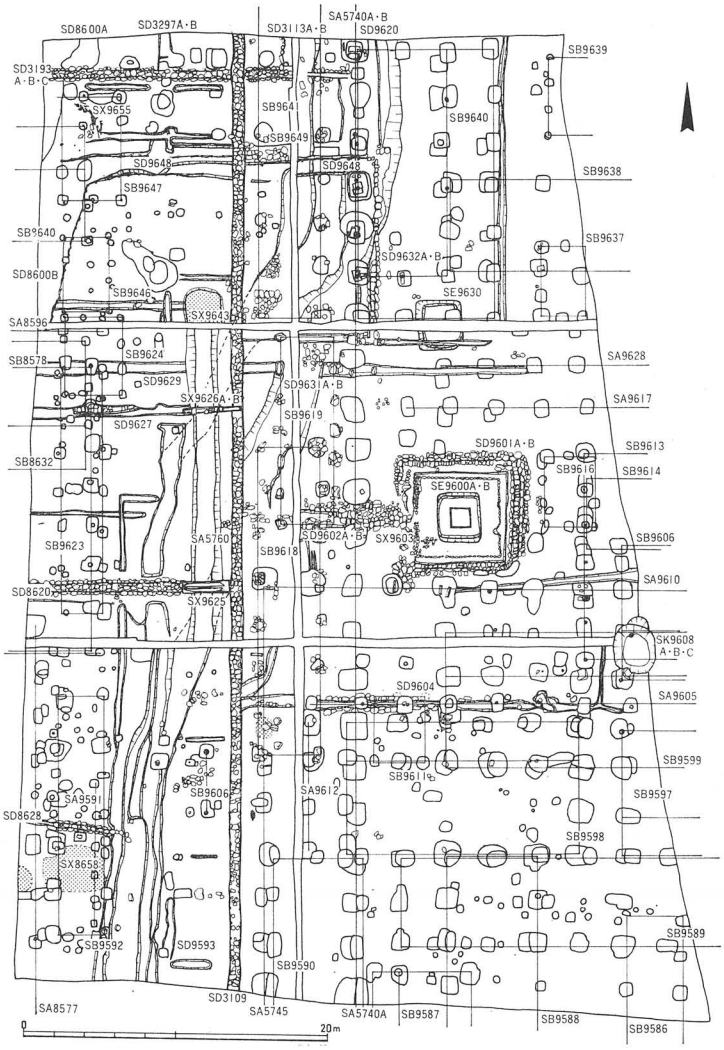
**SD3410**　平城宮東部の南北幹線水路である。第22次南，第29次，第154次，第155次の各調査区で確認した。大極殿後殿の東方約 230 ｍ 付近で，東からくるＳＤ11600（後述）が直角に折れ，ＳＤ3410となって東院張り出し部との境を南流し，平城宮東南隅で，南外堀であるＳＤ1250に合流する。溝幅は，北の方（第154次）では，4～5 ｍ であるが，南の方（第155次）では，約９ｍ に広がる。深さは，1～1.3 ｍ ある。護岸の施設は，上流では西岸だけに約 50 ㎝ 大の玉石積を設けていて，２～５段が遺存していた。しかし当初は素掘りとみられ，後に西岸を改修して玉石積にし，東岸は木杭で護岸している。西岸の玉石積も南では木杭になる。玉石積への改修の時期は，裏ごめに平城宮瓦編年Ⅲ期の軒瓦6282Ｇ・6721Ｄなどが



第104次調査区遺構図

含まれているので，この頃と思われる。溝の層位は大きく上下２層に分かれる。北端の第154次調査区では，下層から和同開珎，万年通宝，神功開宝の奈良時代の貨幣とともに，天平16（744）年の紀年木簡が出土している。しかし南端の第155次調査区出土の土器全体の年代観からは，両層とも８世紀後半から９世紀前半のものである。

出土墨書土器数は，『集成Ｉ』に掲載した第29次調査の140点が最も多く，今回は第22次南と第29次の補遺を加えても35点である。「相模国」，「日置部」などがある。



第128次調査区遺構図

**SD3715**　推定第一次朝堂院と第二次朝堂院との間を流れる南北幹線水路である。第27次，第41次，第97次，第102次，第111次，第136次，第140次，第146次，第157次，第157次補足，の各調査区で検出した。今回，報告するのは，第102次調査以降に出土したものである。溝は上，中，下の３層に分かれ，奈良時代全般を通じて存続するが，中頃に下層を埋めた後，中層の溝は西へ寄せてつくっている。上層は奈良末に中層を埋めた後につくられ，平安時代初頭までつづく。溝幅は約３ｍ，深さは0.4～1.4ｍである。ところどころに木杭による護岸が認められるほかは素掘りである。木簡，瓦，土器など大量の遺物が出土している。

墨書土器は，第157次で出土した85点だけが極端に多い。ここでは「大炊」，「内木工所」関係のものが，集中して出ている。

**SD4100**　南面大垣と推定式部省の南面築地との間を通る宮内東西道路ＳＦ1761の南側溝である。第165次調査区で検出した。この溝は，第32次補足調査でも検出している。『集成Ｉ』の補遺も掲げる。溝は素掘りで，３時期の変遷がみられ，下層の溝幅は約２ｍ，中層は1.2ｍ，上層は2.5ｍある。瓦が多量に出土した。墨書土器の点数は少ないが，式部省との関連を示す「式曹」がある。

**SD4240**　内裏内郭から東方への排水溝である。内裏東外郭官衙を通るときは，南面築地北

雨落溝として機能し，東面築地を抜けてＳＤ2700に合流する。第154次調査で合流部を検出した。第33次調査で明らかにした東外郭官衙部では，凝灰岩の切石で護岸していたが，東面築地を抜けたところから素掘りとなる。溝幅は，西端で2.4ｍ，合流付近では約６ｍに広がっている。深さは1～2.2ｍ。木簡をはじめ，多量の土器，瓦が出土した。墨書土器は，14点あり，中に「政所」がある。

**SD4951**　平城宮の東外堀で，同時に東一坊大路西側溝をかねる。第32次，第39次調査区で検出している。ここでは，第32次調査に出土したものの補遺をかかげる。第32次調査での遺構番号は，『年報1966』と『平城概報４』では，ＳＤ4090になっているが，第39次調査で検出したＳＤ4951の南延長であることははっきりしているので，この番号に統一した(『平城宮木簡三解説』p. 38参照)。溝幅は，第39次調査では，約３ｍであるが，下流の第32次調査区では，約７ｍに広がる。溝の東側は路面幅約22ｍの東一坊大路である。溝の堆積は，大きくは３層にわかれる。下層に堆積する砂の層から，遺物が多量に出土した。木簡，瓦，木製品，金属製品，石製品の各種にわたっている。墨書土器も多く出土した。

**SD5200**　二条々間大路の北側溝にあたる。これまでも第39次，第44次調査で検出しているが，今回報告するのは，東院東南隅の第120次調査で検出したものである。溝はＡ，Ｂ２時期に分かれ，Ｂ期は３ｍ南へずらしてつくられている。Ｂ期の溝幅は約３ｍ，石積の護岸がされている。Ａ期の溝より出土した木簡により改修の時期は天平12年以降である。墨書土器は３点出土した。

**SD8600**　東院地区西端で東北から西南へ斜行する溝である。第104次調査で検出した。溝幅は約３ｍ，深さ0.6ｍ，両岸はシガラミで護岸し，遺存状況は良好であった。多量の木簡，土器が出土している。この溝を埋め立てた整地土中より出土した木簡はすべて和銅年間のものである。土器も，平城宮土器編年のⅠ，Ⅱに限られ，溝の存続期間は，平城宮造営当初から天平初年頃までに限定できる。奈良時代初期の木簡，土器の一括大量出土例として重要である。瓦塼類はほとんど出土していない。墨書土器は少なく，10点である。

**SK9608**　東院地区西方官衙の土壙である。第128次調査区の東端で検出した。Ａ，Ｂ，Ｃ三つの土壙が重なっている。最も古いＡの底からは「蔵人」，「蔵人所」が出土した。土器は平城宮土器編年Ⅲに相当する。

**SD9620**　東院地区西方の南北方向斜行溝である。第128次調査で確認した。溝幅は３ｍ，深さ0.8ｍで，杭と側板による護岸の施設が一部に残る。堆積土中より，「天平」紀年木簡をはじめ，土器，瓦，が多量に出土した。土器は平城宮土器編年Ⅲ，Ⅳ，瓦は平城宮瓦編年Ⅲに属すものである。この溝は全体の様子をみると乱流しており，遺物の年代観からも，天平12～19年の恭仁京遷都時の荒廃期のものと考えている。したがって先述のＳＤ3113へのつけかえは，平城宮へ還都して後である。墨書土器は20点出土した。「物部連安万呂」，「大凡小長谷造国」の人名がみえる。

**SD10250**　若犬養門西北の池状遺構ＳＧ10240から南面大垣を通って二条大路北側溝ＳＤ1250に通じる南北溝である。第133次調査で検出した。溝幅は7.0ｍ，深さ1.8ｍ。平城宮造営以前からの旧流路を改修したものである。溝の変遷は複雑で，旧流路も含めて大きく５期に分かれる。改修当初は暗渠であったが，途中いったん開渠にし，再び暗渠にしたのち最後はま

た開渠となっている。「神亀6年」の紀年のある木簡をはじめ土器，瓦が出土している。墨書土器は2点ある。

**SD10325**　ＳＤ3715の中層が，第一次朝堂院の南端あたりで，一度西に屈曲してふくらみ，南流して再びもとの位置に戻る時期がある。このふくらんだ部分の南北溝にあたる。第140次調査で検出した。幅2.5ｍ，深さ0.8ｍの素掘りの溝で，ＳＤ3715にもどるときに南東へ斜行する。溝の年代は，奈良時代後半である。墨書土器は，3点ある。

**SD10550**　平城宮東部の南北幹線水路であるＳＤ2700に，東から注ぐ東西溝である。第139次調査で検出した。幅2.7ｍ，深さ1.7ｍの素掘りの溝である。堆積土は上下2層あり，下層からは，「天平元(729)年」と「天平6(735)年」の紀年木簡，最上層からは，「天応元(781)年」の墨書土器が出ている。規模も大きく，この地区の区画割りをきめる基本的な東西溝である。大量の土器が出土したが，墨書土器は，7点である。

**SK10727**　第一次朝堂院地区を画する東築地塀の外側で，東第二堂の東南方向の位置に掘られた大土壙である。第140次調査で検出した。南北8.4ｍ，東西8.7ｍ，深さ0.3ｍである。平城宮の廃絶に近い時期の土壙で，出土した多量の土器は，平城宮土器編年Ⅳ・Ⅴの時期に属する。墨書土器は5点出土した。

**SD11600**　ＳＤ3410の北端に東から合流する東西溝である。第154次調査で検出した。幅5.8ｍ，深さ1ｍの素掘りの溝で，ＳＤ3410と交わるところには橋がかかる。溝の堆積状況はＳＤ3410と同じである。墨書土器は14点ある。

**SD12340**　伊福部門（西面北門）から東に延びる宮内東西道路の北側溝と考えるものである。第164-21次で検出した。溝幅は約4ｍ，深さ0.7ｍで上下2層の堆積がある。下層からは「神亀3年」の木簡，上層からは「天平勝宝」～「宝亀4年」の木簡が出土している。しかし，出土した多量の土器は，上，下層とも平城宮土器編年Ⅴが主体で，軒瓦も奈良時代後半のものである。墨書土器は，7点ある。

『平城宮出土墨書土器集成Ⅱ』　墨書土器出土遺構一覧

| | 次　数 | 出　土　地　区　名 | 出　　土　　遺　　構 |
|---|---|---|---|
| 集成Ⅰの補遺 | 第4次 | 6ABO—K | |
| | 6 | 6ABO—J | |
| | 20 | 6AAO—G | |
| | 21 | 6AAC—B・H・N | SD2700 |
| | 22(南) | 6AAF—A | SD3410 |
| | 28 | 6ACC—F | SD3825, SK3831, SK3832 |
| | 29 | 6AAG—C・M | SD3410, SD4575 |
| | 32 | 6AAI—M・N・O | SD1250, SD4090 |
| | 32(補) | 6AAI—C | SD4100 |
| | 102 | 6ABG—B | SD3715 |
| | 104 | 6ALR—S・T・U | SD3236, SD8600, SD8620, SD8622, SD8588<br>SA3237, SB8591, SB8638, SX8755, SX8756<br>SX8757, SX8666, SX8762 |
| | 110 | 6ALF—I | |
| | 111 | 6ABG | SD3715 |
| | 120 | 6ALF—P・Q | SD5200, SE9295 |
| | 122 | 6AAY—B・C・F | SD1250 |
| | 128 | 6ALR—Q | SD3109, SD3113, SD3193, SD3297B, SD9601<br>SD9620, SD9688, SD9690, SA5760, SA9591<br>SB8640, SB9606, SB9613, SB9640, SB9592<br>SK9608A・B・C, SK9691, SX9683, SX9689 |
| | 129 | 6AAA—G | SD2700 |
| | 133 | 6ACU・CH—D・E・H | SD1250, SD10220, SD10250 |
| | 136 | 6ABI・BJ—A・B | SD3715, SD9171, SD10325 |
| | 139 | 6AAA・AB—F・S・T | SD2700, SD10550 |
| | 140 | 6ABI・BV・BU—A・B | SD3715, SD10705, SD10706, SD10325,<br>SK10727 |
| | 146 | 6ABK・BJ・BW—A・B | SD3715 |
| | 153 | 6AAR—C | |
| | 154 | 6AAD—C・F | SD2700, SD3410, SD4240, SD4850,<br>SD11600, SX11524 |
| | 155 | 6AAI—D | SD1250, SD3410 |
| | 157 | 6ABL—D | SD3715 |
| | 157(補) | 6ABL—D | SD3715 |
| | 164-21 | 6ADB | SD12340 |
| | 165 | 6AAY—B・C・O | SD1250, SD4100, SK12050, SK12060<br>SX12094 |
| | 167 | 6AAY—B・C・F | SD1250 |
| | 溝辺 | | SD2700 |